京都教区時報

京都教区広報委員会
編集長　村上透磨
京都市中京区
河原町通三条上る
TEL 075－211－3468
FAX 075－211－4345
kouhou@kyoto.catholic.jp

Home Page http：//www.kyoto.catholic.jp　4345

2頁～6頁　高校生会　夏合宿　沖縄 現地体験学習
7頁～9頁　ワールドユースデー 2016 クラクフ大会

点訳版「京都教区時報」〈無料〉ご希望の方は点訳ネット「レジナ」代表嶽崎(たけざき)裕子さんまでお申込みください。
TEL・FAX 079－431－8601

2016年　司教年頭書簡　御父のように、いつくしみ深く

9．自分を正当化しない

同じタイトルは、昨年の教書（年頭書簡）にも表れ、司教の深い心の思いを感じます。

それは、単なる重複でなく、むしろその内容を深めることにあると思います。ただ同じタイトルであっても、観点も引用されている箇所も違います。観点の違いでいえば、昨年はこれを「認識的センス」として語られていて、今年は「批判的センス」として語られています。昨年は自分の貧しさを理解し、謙虚に神の憐みにすがること。今年は、自分の惨めさを自覚し、隣人を辱しめたり、蔑んだり、神の救い（神の義と憐み）から破門しないこと（破門＝共同体からの閉め出し）つまり他者に向いています。

では今回も、引用されている聖書に従って考えてみたいと思います。

まず「心の貧しい人は幸い」（マタイ5・3）について。「心の貧しい人」とは、自分の「貧しさ」を知り、謙虚になり、自分を義としないだけでなく、罪人を救いの対象から除外しないという観点から「私は罪人を招くために来た」（マタイ9・13）という、貧しい人に向かうキリストの正当性（人となられた神の子キリストの本質）が語られます。

また私たちは、いけにえを捧げることによって、神の義（救い）を勝ち取るのだと思っています。でも、主は「私が求めるのは、いけにえではなくあわれみで

シモンの家にいるキリスト
（ルカ7・36～39、44～50）

10
2016

ある」（ホセア6・6）の言葉を使って答えます。この場合のいけにえは、罪のゆるしのために捧げられる供え物だけではなく、私たちの血を流すほどの愛の行い、即ち私たち人間の努力をも含めた徳行も含まれているでしょう。つまり私たちが自分のかぎりを尽して獲得した義ではなく、神の憐みと慈しみに満ちた愛の無償の賜物が救い（義）をもたらす。それを謙遜に認め、気付き、感謝と讃美の心を持って受け入れる事にあるというのです。だから司教は「神の心を喜ばせるのは、みずから義人と思いあがることではなく、謙虚に回心することです。人間は、神のあわれみを受けているから、神の前で自分を正当化する必要はなく、反対に、あわれみに値しない己の醜さを素直に認めなければなりません」と語ります。

教皇フランシスコが、信徒相互のいがみ合いを嘆いておられますと訴えますが、この互いのいがみ合いは、お互いが自分を正当化することによって起こるのだということでしょう。

最後に、その状態から救い出してくれるのは、神の憐みに包まれて謙虚になり、兄弟愛に結ばれることによってのみ解決するのだと説いています。

こうして次の「10. いつくしみの相互関係」のテーマへとつながって行きます。

（村上 透磨）

「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえ
（ルカ18・９～14）

高校生会　夏合宿
沖縄　現地体験学習

沖縄に来て思ったこと

唐崎教会　高校一年　池田瑠智亜

私は、今回沖縄に来て、沢山の物を見たり聞いたりしました。どれもとても心に残る内容でしたが、中でも、自分たちと同じ年で同じ女性である「ひめゆり」についてのことが、一番印象に残っています。ひめゆりの資料館には、ひめゆりとして働いていた方の証言ビデオや、亡くなった方の持ち物、顔写真とプロフィールなど、当時の風景が思い浮かぶ様な物が沢山ありました。亡くなった方々の持ち物の中に可愛いメモ帳があるのを見て、私は、「ひめゆりの方達も、戦争中でも、今の私達と同じように、メモ帳などを買って喜んでいたんだな。」と思いました。そのような方達が足を切断する手伝いをしたり、死体の上を歩いたりしていたなんてとても悲しいことだと思いました。実際にガマ（洞窟）に入ってみましたが、ガマの中はとても暗

くて、すべりやすくて怖い所でした。そんな所にケガ人や死体と一緒にいるなんて、私には無理です。私の友達や家族も無理だと言うと思います。ですが、ひめゆりの方はしていたのです。

彼女達の、青春や、生きる楽しさ、命は、私が何をしても返ってくるわけではないけれど、今回学んだことを、他の人に伝えることによって、二度とこの様なことがおきないようにすることは、できると思うので、なるべく沢山の人に伝えようと思いました。そして、沖縄に来たことが無い人は、ぜひ来てほしいと思いました。

高校生会沖縄体験学習について

河原町教会　高校一年　研　文乃

沖縄体験学習で、特に印象に残っているのは資料館です。歴史の授業では、沖縄戦で亡くなった人の多くは「天皇万歳」と言いながら死んでいったと聞きました。しかし私はそう言って死んでいった人の気持ちが理解できないでいました。自分だったら死ぬときには一番大切な人のことを思いたいからです。資料館には私の疑問の答えがありました。「死ぬときにはみんな『天皇万歳』ではなく、お母さんやお嫁さんの名前を呼びながら死んでいった」と書いてありました。今回沖縄に来て、学校では習わないこと、沖縄に実際に来なければわからないことをたくさん知ることができました。もし来ていなければ私はずっと疑問を胸に抱いたままで、すっきりしなかったと思います。

観光ではなく平和学習として沖縄に来ることができてよかったです。今回体験したことを身近な人たちに話して、沖縄の歴史に少しでも関心を持ってもらえたらいいなと思います。

沖縄合宿で学んだこと

河原町教会　高校一年　守口　真衣

私は今まで広島の原爆ドームにも何度か行き戦争には興味がある方なのですが、二日目に行った資料館や平和祈念館などのビデオや展示を見ていても、どこかアニメやドラマを見ているようで、本当にあった出来事ということはわかっているのですが、信じきれない部分がありました。しかし三日目で行ったガマ体験でそんな考えが全て消えました。ガマの中は思っていたより暗く、寒く、とても怖い場所でした。懐中電灯を持っていても中は怖く、懐中電灯を全て真っ暗にした時はとても怖く、ほんの一瞬だったのに早く明るくしてほしいという気持ちでした。そんなとても怖い中、私達と年の変わらない少女達が、ガマの中で働いていた、本当にこの場所で戦争が行われていた、ここでたくさんの人が亡くなっていった、そんな現実を見て、知って、とても辛い気持ちになり、涙があふれました。今まではテレビを見ているような感覚で、あくまでも他人事でよかったのですが、今回の沖縄の戦争学習で戦争の怖さ、恐ろしさを心の底から感じました。ここまで苦しくなり、涙があふれるまで戦争の事で考えたのは初めてのことでした。

今回感じたこと、学んだことを家族や友達などに話したいと思います。たくさ

んの人に伝え、沖縄では昔あんなひどい事があったのだと知って欲しいし、戦争の事を忘れず、心にとめて生活して欲しいと思いました。

高校生会沖縄体験学習

大和郡山教会　高校一年　センサノみゆき

7月25日、ほとんどの人が初対面でうまくやっていけるか心配でしたが、みんな仲良く素敵な1日をスタートすることができました。読谷教会に着くと、私達のために晩ご飯を作って下さった人が、温かく出迎えて下さいました。

二日目の朝、平和記念公園の資料館で戦争のときの映像を見たとき、この世界には、私たちのように神様が呼んでくださったたくさんの人がいて、そのいただいた一つだけの命が、死ぬことを望んでもいないのに、戦争で亡くなったと聞いて、かわいそうだなと思いました。

三日目は首里城・斎場御嶽に行き、ガマ体験にも行きました。ガマは一つだけではなく、違う場所にもありました。

長い間、暗いガマの中で水や食べ物がほとんどない生活をして、それでも頑張って生き残りたいと思っていた人が亡くなってしまい、きっとやりたいこともたくさんあって、やっていないことが多かったと、ガイドさんから聞いて、すごくグッときました。

斎場御嶽

沖縄合宿で得たもの

桃山教会　高校一年　土持こなみ

今回の合宿で広島・長崎の「世界大戦で最も被害の大きかった三つの地域」に全て行ってそこで平和学習をしたことになります。広島には小学校の修学旅行と中学生会の夏合宿で、長崎には中学校の修学旅行で行き、それぞれ資料館や史跡を訪れたりして平和学習をしましたが、沖縄はそれとは少し違う感触でした。単純に言うと、受けた衝撃が他よりもかなり大きかったのです。

勿論、広島も長崎も悲惨な爪跡を残す犠牲者の遺品や資料は目を覆いたくなるようなものばかりでしたが、どこか今一つ想像がつかず実感が沸かなかったのです。そこら中一体が焼け野原だとか、人があちこちで倒れているだとか、今の平和な所から考えられなかった私は、漠然とした恐ろしい光景しか思い浮かばず、いまいちわかりませんでした。しかし、沖縄での平和学習は実際のガマに入ってその暗さを体験したり、ひめゆりの塔の資料館で女学生一人ひとりの性格と共に書かれた詳細な死因を知ったり、斎場御嶽の中にもある砲撃の後を見たりしていると、非常に具体的に当時の惨状が頭に浮かんで、私は身震いさえしたほどショックを受けました。ガマの中に置き去りにされて真っ暗な中、痛みと苦しみで、あちこちからうめき声が聞こえてくる様子、入口からガス弾を撃ち込まれてパニック状態になりながら次々と死んでいく女学生達、外に逃げ出した住民が機銃掃射によって倒れていく光景、それら

が鮮明に映し出され、私は今までに感じたことのない恐怖を覚えました。もしも自分が70年前に生まれていたら…。怖くてその先は何も考えられませんでした。

この沖縄合宿で私が得たものはたくさんありました。沖縄戦についての知識、米軍基地やガマの内部を見た経験、そして更なる信仰。この合宿は確実に私の今後に向けて役に立っていく合宿であったと、私は思います。

沖縄合宿

彦根教会　高校二年　高橋真由美

一日目はずっと移動でしたが、フィリピンの人たちが食事を作って下さって、初めて出会ったのにすごく親切でフレンドリーに接して下さりました。

二日目は、朝からミサでした。日本語のミサは一ヵ月前から聞き始めたので、祈りの時に何を言えばいいかわからなかったので少し困りました。でも、なんとかついていけました。

最初に行ったのが平和記念公園でした。すごくきれいな所でした。資料館に入って沖縄戦を中心にいろんな事を学びました。例えば、いつ、どうやって、どこから米軍が攻めて来るかや、戦争中の人々の暮らし方などが展示されていました。それを見て、もし同じ時代に生まれていたら、自分はどうしていたのだろうか、どれだけ苦しんでいたのだろうかと、想像してしまいました。

次に、外へ行って戦争で亡くなった人々全員の名前が刻まれている刻銘碑を見ました。約20万人の名前がありました。どれくらいの数なのだろうと想像もできなかったのですが、刻銘碑の数を見てすごくびっくりしました。

それから、ひめゆりの塔に行って記念館を見学しました。記念館に入る慰霊塔で亡くなった「ひめゆりさん達」に祈りました。記念館では亡くなった216人の人たちの写真や名前が展示してありました。年齢を見たら、ほぼ自分と同じ年齢でした。今、自分は恋愛とか青春のことばかり考えていて、ひめゆりの人達はそんな事を考えるひまもなく、まだやりたい事がたくさんあるのに亡くなって、それを思うと自分は甘いなぁって思いました。これからはもっと自分に厳しくしたいです。

そして、アメリカ基地に入れると聞いて行ったのですが、残念ながら18歳以上じゃないと無理でした。

三日目は、基地を道の駅から見て、首里城公園を見学してから、世界文化遺産の斎場御嶽に行きました。

次に、糸数アブチラガマに行って当時どのように戦争をすごしたかを、実際にガマに入ってガイドさんの話を聞きました。中は自然でできた洞窟で凸凹していました。自分はきっと耐えられないと思いました。

この合宿はとても良い勉強になりました。この合宿を活かして、これからは色

アブチラガマ

んな事を考えたいです。

※アブチラガマ（アブ＝深い縦の洞窟、チラ＝崖のこと、ガマ＝沖縄の方言で洞窟やくぼみのこと）

沖縄に行った意味

西院教会　高校二年　粟井　幹

今年の高校生会夏合宿は沖縄でした。

一番僕の中で考えさせられたのは、日本の平和に対する教育のあいまいさです。今年の六月、学校の研修旅行でシンガポールに行きました。その事前学習として、日本軍が戦争中シンガポールを占領していたことなどを学び、そのように、日本が外国にどれだけひどいことをしていたかを、なぜ、もっと義務教育として学んでいないのかと思いました。やはり、広島・長崎に原爆が落とされ、沖縄では地獄のような地上戦が行われ、その悲惨さを世界に向けて伝えるということも大切です。しかし、被害ばかりを日本は受けているのではありません。実際、太平洋戦争を始めたのは日本ですし、まずは日本が占領していた国に対してどれだけ残酷なことをしていたのかということをしっかりと勉強してから、戦争が不必要だといえる、実際日本で起こってしまった悪い例を世界へ向けて発信すべきだと思いました。

やはり、戦争はあってはなりません。僕がそのことを強く思えるのは、今回の沖縄での平和学習で学んだことがあるからです。今回の合宿で学んだことを忘れず、日本人同士、力を合わせて後世に残していかなければならないと思いました。

過去への共感

唐崎教会　高校二年　田中　拓実

今回、僕たちは三泊四日の日程で、さまざまな戦争の悲惨さを伝える場所に行ってきました。どの場所でも、地上戦による被害や犠牲の大きさを、戦争という「非現実」なものを「現実」として感じられる生々しい表現や展示方法をしていました。

先程、戦争を「非現実」という表現をしましたが、これは平和な現代を生きる我々のような「戦争を知らない世代」は、戦争をただ単に「過去に起こったひどい出来事」として認識しているのではないか、と思ったからです。「過去に起こったことは、私達にはわからない。」きっと、こう考えているからではないかと思います。僕も以前はそうでした。

しかし、このような考え方はとても閉鎖的で思いやりや共感には程遠いのではないかと、最近ようやく気付きました。

他の人に起きたことを、自分の身に起きたことのように感じ、共感することができなければ、他の人を思いやったり、やさしくすることもできません。なぜなら、相手を理解しようとしていないからです。

戦争にも同じことが言えます。我々には、戦争がどういうものかは、分からないかもしれません。それでも、分かろうとすれば完全ではなくても、理解・共感できる部分はきっとあるはずです。僕は、皆が皆、相手を理解できる、相手を思いやれるときに、平和が訪れると思います。

ワールドユースデー2016 クラクフ大会（ポーランド）

Krakow WYD 2016

ワールドユースデー（WYD）とは

ワールドユースデーは、国連が1985年を「国際青年年」と定めたことを受け、教皇ヨハネ・パウロ二世が、青年たちにローマへと集うように呼びかけたことにはじまります。その後、2～3年ごとに世界各地でWYD世界大会が開催されるようになりました。

愛といつくしみの神

大塚　乾隆助祭

「ポーランドどうでしたか」と聞かれても、帰ってきてしばらくは答えられませんでした。それは、二週間の滞在の中でキルツェ教区でのホームステイや、WYD（ワールドユースデー）クラクフ大会、その後アウシュヴィッツや巡礼地などへの訪問を通して多くの体験をさせていただき、それを通して色々なことを考えたからです。しかし少しずつ整理することで、ポーランドでの体験は「神は愛といつくしみである」ことにまとめることができました。

神の愛といつくしみは、人を通して表れます。私たち日本巡礼団に心と家の扉を開けて迎えてくれたホームステイ先の家族や、WYDに同行してくれたサンスター日本語学校のボランティアの方々は、自然と他者を迎え、自分たちの時間や寝床を犠牲にしてでも私たちを受け入れてくれました。そのポーランドの人の優しさの中に神の愛といつくしみを感じました。また、神の愛といつくしみは祈りや秘跡を通しても表れます。祈っている人の中に神が働き、また特にゆるしの秘跡を通して、人間の理解を超える神のゆるし・神のいつくしみが表れているのを体験しました。

一方、愛といつくしみの神は、その愛といつくしみを表せないこともあります。WYD中の数回にわたる教皇フランシスコの話から、私は今まで以上に神を身近に感じました。本当に神が私の心の扉をたたいているような思いです。それがあったからでしょう。アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所で亡くなった方々のために祈り、その後テゼの「いつくしみと愛のあるところ、神そこに」を歌いましたが、その時私は、「神が愛といつくしみの方ならどうしてこんなことが起こるのか」という疑問と、「神はいつでもどこでもおられる」と教わったことが同時に頭の中に浮かびました。しかしその時、愛といつくしみを表せない神のつらい表情や神の痛みが思い浮かびました。神はご自分の愛といつくしみを表したいと切に望んでいるのに、人間の愚かさによって、それができないでいるのです。

ポーランド滞在を通して、私は神が愛といつくしみの方であることをより強く感じました。私たちは神の愛といつくしみを表すことに協力できます。しかし、私たちの日常の言動によって私たちは神の邪魔をしていることもあるのです。そしてそれが「私たちの罪をおゆるしください」と祈ることにつながっていくのだとも思いました。

WYDに参加して

松阪教会　吉田　広

7月22日から8月5日までWYDクラクフ大会に参加させて頂きました。異国の地ポーランドで14日間過ごす事が出来

るのかと、とても不安な気持ちのまま、大会のテーマである「慈しみの心」を求めポーランドへ旅立ちました。ここで、印象に残った体験を三つお伝えしたいと思います。

一つ目はホームステイでの体験です。ホームステイ先では、3日という短い期間で、言葉が通じないにも関わらず、行動で見知らぬ私達を受け入れて下さるという事を示して下さいました。朝から夜遅くまで、私たちのスケジュールに合わせて食事の用意や洗濯、そしてお弁当まで作って下さり、毎日感謝でいっぱいでした。なによりも、暖かい言葉や対応がありがたく、慈しみの心が体現されていたと感じました。

二つ目はＷＹＤ本大会での体験です。

開催地クラクフは、テロを警戒し物々しい空気の中、世界中の青年達との出会いがありました。ひとたび日本の国旗をもって町を歩けば人気者で、様々な国籍の青年から声をかけられます。また、政治的に対立がある国同士が手を取り合って写真を撮っている姿などもあり、国籍は違っても信仰のもとに集う想いは一つであると体感する瞬間でした。そして、夜半のミサは、地平線までカトリックの青年で埋め尽くされた光景の中で行われ、何物にも代えられない経験となりました。言語が違っていてもミサの流れや音楽等は共通している部分があり、１００万人以上の人々と共に、同じ祈りをささげる瞬間の感動は忘れられません。

三つ目はアウシュヴィッツでの体験です。現在のアウシュヴィッツはとても静かな場所でした。そんな場所でどうして慈しみと真逆といえる世界ができてしまったのか、信じられませんでした。第１収容所の死の壁の横にある、コルベ神父が身代わりの愛により殉教された場所を見た時、言い表せない気持ちで、心が痛みでいっぱいになりました。そして、第２収容所の奥にある、通常は入れない場所に池があります。じつはこの池は、ガス室で焼かれた遺体の灰を、穴に埋めた跡をカモフラージュするために作った池で、今自分が立っている地面が、全て遺灰であると説明を受け、そこで本当にアウシュヴィッツ１５０万人虐殺という規模を体感し、全身が震えたのを覚えています。

今回、ボランティアの青年やホストファミリーの見知らぬ人への愛に触れ、その行動はまさに慈しみの心から生まれてきたものだと感じました。また、ポーランドでは信仰が生活に根付いていて、信仰を中心に生活が営まれていたのをみて、普段の自分の信仰は、どこか教会の中だけになっていた事に、気が付きました。かけがえのない経験となったＷＹＤに参加させて頂き感謝しています。

ＷＹＤクラクフ大会に参加して

河原町教会　平野　有紀

先日、ポーランドで第31回ワールドユースデーが開催されました。今年はいつくしみの特別聖年であり、聖ヨハネ・パウロ二世の故郷での開催ともあって、大きな期待と希望を胸に参加しました。この巡礼は私にとって神のいつくしみを体験する貴重な旅となりました。

私達はキェルツェ教区に三

日、クラクフに六日、オシフィエンチムに三日滞在し、その全てで驚くほどの歓待を受けました。まずキェルツェでホームステイをした時、初めて会う、言葉の通じない外国人である私達のために、様々な用意をして下さったことに驚きましたが、何よりも笑顔で出迎え、常に不便はないかと気にかけて下さることに大きな愛を感じました。「家の扉と心の扉を開いてお迎えします」という言葉通りのもてなし、受け止めきれずあふれるくらいの愛を受けているうちに、ふとした瞬間、私は神様の愛を受けているのだと思い至りました。

クラクフに移ってからも、ポーランドの多くの人の温かいもてなしを受けながら、祈りや分かち合いを通して、世界中の青年や教会、自分自身と向き合う毎日を過ごしました。キェルツェで別行動だった成田組・福岡組と合流してからは、全く面識のない人、話す機会のない人が増え、同じ巡礼団として行動していながらも、どこかまとまりきれない状態を少し苦痛に思うこともありました。でも私の感じた小さなつまずきは、共にミサに与り、共に祈っていると、何でもないことだと思えました。

今大会のテーマ「あわれみ深い人々は、幸いである、その人たちはあわれみを受ける」について、私はずっと考えてきましたが、考えれば考えるほど難しいように思いました。カテケージスの準備をするに当たっても、いつくしみとは一体何なのか、散々悩みました。私はその答えを、ポーランドで出会った人達が示してくれたと思います。受け入れてくれた全ての人を通して、私は御父のいつくしみを実感しました。

集まった青年の中には、ドイツとロシアの青年もいました。ポーランドの凄惨な歴史を考えると、途方もないことだと思います。けれど、フランシスコ教皇が語られたように、私達一人ひとりが招かれ、計り知れない愛を受けていることを考えると、その大きな喜びが何をも超えてしまうのだとあらためて感じました。そして、今大会参加のために支えて下さった全ての方に深く感謝するとともに、私もいつくしみの炎を絶やさず歩いていこうと思います。

2016年「病者・高齢者訪問講座」

第2回『苦しむものとともに苦しむ神』「サルヴィフィチ・ドローリス」より
苦しみのキリスト教的意味を探る

講師　中川博道師（カルメル会）

苦しみの中から生まれた書簡

『サルヴィフィチ・ドローリス』はヨハネ・パウロ二世が二度にわたる暗殺未遂事件によって心身ともに深く傷つかれた中で書かれた、圧倒的な迫力を持った書簡です。この中でヨハネ・パウロ二世は、苦しみは人間に付随する普遍的テーマであり、人間は苦しむ者である、そしてそれはどこにいてもどの時代にも変わらない現実であると言っています。

本当の自分へ呼ばれる

苦しみの意味を探し求めることの中

に、自分が自分になってきたプロセスがあります。苦しみの中で本当の自分へと呼ばれていくのです。ヨハネ・パウロ二世は、わたしたちの苦しみはキリストの苦しみに結ばれて、人の贖い、救いに必ず結びつくということを示しています。自分が苦しむこと、乗り越えようとしてもがき続けることが、それがどんな苦しみであったとしても、主において受け止めて生きていくということが、人の救いに結びついていくのです。

苦しみの二つの側面

「苦しみ」には二つの側面があります。苦しみには、人間的な意味として、自己を超越させながら本当の自分になっていく道が隠れていると同時に、超自然的な（神の）意味として、キリストとともに苦しむことによって人の贖い、救い、神との出会いの回復がなされていきます。この書簡の中から見える苦しみについてのモティーフ（動機）は、二つのポイントがあります。苦しみによってわたしたちは本当の自分へと抜け出ていくこと、そしてこの苦しみは、キリストとともに苦しむときに、人が神と出会っていくこと、贖いを実現していくことです。

人生の振り返りと意識化の必要

苦しむというテーマが人間のテーマであるとするならば、人間そのもののテーマを考えるとき、神との関係性なしに人間のことはわかりません。苦しみの意味がわかるということは、人間の意味がわかるということ、そして神の本質がわかるということであり、つまり神のもとにいけば苦しみの意味がわかるのです。

自分はなにを苦しんできたのか、という人生の振り返りをすすめます。苦しみの意味を考えることは、自分の人生を考えることと重なるからです。意識化して整理することによって、〝なんとなくの不安〟がすっきりします。

不安をかきたてられたり、先が見えなくて苦しみを募らせていくようななかで、いくつかの言葉が自分を支えてくれることがあります。

苦しむものとともに苦しむ神

イエス・キリストは苦しみへの究極の答えです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3・16）という聖書の箇所から、わたしという存在は、父と子と聖霊の交わりの神が、独り子を失ってでも失いたくないと思った存在なのです。

またキリストの十字架の出来事を通して、キリストのおかげでわたしたちが苦しむことの中に意味が生まれました。ガラテヤの信徒への手紙の中でパウロは、

誰のために苦しんだのか、ということを絶えず明らかにしています。自分を愛してくださった究極の相手である神のために苦しむということなしに、究極の苦しみは耐え得ないのです。

ヨハネ・パウロ二世ははっきりと、苦しみは試練だと言います。これは「善きサマリア人」につながることですが、善きサマリア人はキリストの生き方にわたしたちが招かれるということです。「追いはぎに遭った人」、つまりひどい目にあって立ち上がれないくらいに傷ついている人、奪われた人、そのような人はまわりにたくさんいます。ヨハネ・パウロ二世がすすめることは、そのような人々に近づいていって、自分の一日を捧げてでも、自分に痛みが伴うことでも、寄り添うことです。そうしていくことで人は必ずこの苦しみが自分の救いになり、また人の救いにつながっていきます。苦しみの救いの働きの意味はこのようなところにあるのです。

福音宣教企画室

10月のお知らせ

教　区

典礼委員会／Tel.075(211)3025 ㊊㊌㊍

典礼研修会
日　時：15日㊏ 14:00〜15:30
テーマ：ミサと日常
講　師：奥村 豊師
対　象：典礼部、典礼奉仕者
会　場：河原町教会 ヴィリオンホール
（申込み不要、参加費不要）

聖書委員会／Tel.075(211)3484 ㊌㊍

聖書講座「神の正義と神のいつくしみ」
日　時：12日㊌ 19:00 13日㊍ 10:30
テーマ：イエスのいやし
講　師：西 経一師(神言会)
日　時：26日㊌ 19:00 27日㊍ 10:30
テーマ：イエスのゆるし
講　師：片柳 弘史師(イエズス会)
会　場：河原町教会 ヴィリオンホール

よく分かる聖書の学び(ヨハネ福音書を読む)
日　時：19日㊌ 10:30
講　師：北村 善朗師／参加費：300円
会　場：河原町教会 ヴィリオンホール

福音宣教企画室／Tel.075(229)6800

－信仰－ 家庭でどう伝える？
第1回「青少年司牧の現場から」
日　時：22日㊏ 14:00
講　師：北川 大介師(サレジオ会)
会　場：カトリック会館6階
受講費：300円

京都教区カトリック正義と平和協議会

現地学習会「舞鶴・世界記憶遺産を訪ねて」
日　時：10日㊊ 京都駅出発 9:00〜18:00
行　先：引き揚げ記念館・自衛隊駐屯地・浮島丸受難の碑・西舞鶴教会
現地案内：高橋 一郎氏
参加費：3,000円／各自弁当持参
申込要：Tel・Fax.075(223)2291

修　道　会

男子カルメル修道会(宇治修道院)
Tel.0774(32)7016 Fax.(32)7457

一般のためのカルメル霊性セミナー
（松田 浩一師）
日　時：14日㊎ 17:00〜15日㊏ 16:00
参加費：7,500円

水曜黙想(シスター・ロサ)
日　時：19日㊌ 10:00〜16:00
テーマ：神に愛されている喜び
参加費：3,000円

キリスト教霊的同伴(松田 浩一師)
日　時：21日㊎ 20:00〜22日㊏ 15:00
参加費：6,500円

聖書深読(中川 博道師)
日　時：22日㊏ 10:00〜16:00
参加費：2,500円

諸　団　体

望洋庵／Tel.075(366)8337
Eメール　bouyouan.seinen@gmail.com

青年のための聖書入門講座
日　時：13日㊍ 19:00
テーマ：講座の次の主日の福音箇所
対　象：青年男女(初めての方歓迎)
参加費：200円(食事代含む)
（申込不要）

はじめての黙想会
日　時：14日㊎ 10:00〜16:30(15:30ミサ)
参加費：1,000円(食事代含む)
（電話で申し込んでください）

京都カトリック混声合唱団
練　習：9日㊐ 14:00
22日㊏ 18:00 ミサ奉仕後
カトリック会館6階

コーロ・チェレステ(女声コーラス)
練　習：6日㊍ 10:00／13日㊍ 10:00
27日㊍ 10:00 カトリック会館6階

聴覚障がい者の会(どなたでも参加可)

教会訪問 －手話ミサと交流会
日　時：4日㊋ 11:00〜14:00
場　所：草津教会
参加費：700円(昼食代)
申込要：Tel・Fax.075(723)1135 傳(つとう) 裕子

心のともしび　番組案内
テレビ(衛星.CATV)スカイAスポーツプラス
毎週土曜日 朝7:45
シリーズ「小さな気づきを大切に」
出演は阿南 孝也氏(洛星中学高等学校 校長)
ラジオ(KBS京都) ㊊〜㊎ 朝5:55
㊏ 朝5:15
10月のテーマ「わたしたちの『お母さん』」

※12月号の原稿締切り日は10月26日㊌です。

大塚司教の 10月のスケジュール

Schedule of Bishop Otsuka

1日㊏ 10:30 小教区評議会役員交流会
（河原町）
2日㊐ 9:00 洛東ブロック司教訪問
（山科）
6日㊍ 10:00 中央協 常任司教委員会
15:00 日本カトリック神学院
常任司教委員会
7日㊎ 9:30 特別臨時 司教総会(中央協)
8日㊏ 10:30 ユスト高山右近 講演
（梅田サクラファミリア）
9日㊐ 16:00 四日市教会
アパレシーダの聖母 ポルトガル語ミサ
11日㊋ 18:00 グリーフケア講座
（龍谷大学 響都ホール校友会館）
22日㊏ 15:00 ノートルダム教育修道女会
金祝ミサ(岩倉修道院)
23日㊐ 14:00 草津教会(英語ミサ)
24日㊊-28日㊎ 教区司祭 年の黙想
（軽井沢 宣教クララ会 黙想の家）
29日㊏-30日㊐ 大阪教会管区 青年の集い
（小林聖心女学院 ロザリオヒル）
31日㊊ 14:00 中央協 予算審査会

2016年ＹＥＳ

桃山教会　**岩城　光**

YES は毎年開催されている京都教区の青年の集まりで、今年で15回目になります。「YES」すなわち「Youth, Encounter Enjoy Exchange Etc…, Space」の名のとおり、お互いに出会い、楽しみ、分かち合いの中で思い、経験、生き方を交換することで、信仰や友好を深めていこうとするイベントです。

YES2015

「いつくしみの特別聖年」という言葉は今年何度も耳にしたでしょうが、結局「いつくしみ」とはどういうことか、なぜいま「いつくしみ」なんだろうかということを青年どうしで話し合ったことは、あまりないかもしれません。

そこで YES2016では、テーマを「いつくしみ深く、御父のように」に定めました。青年どうしで「いつくしみ」について分かち合いをして、司教様から講話をいただき、二日目には、河原町教会で「聖なる扉」の閉門ミサに与ります。もちろん、交流会やレクリエーションで、青年どうしとの交流も深まります。

特別聖年終了直前の二日間（11月12日～13日）多くの青年と出会い、「いつくしみ」について一緒に考え、楽しく語り合いましょう。詳細は、京都カトリック青年センターのウェブサイトをご覧ください。

京都カトリック青年センター
YES 2016実行委員会

〔青年センターHP〕 携帯からでもご覧いただけます。 http://www.kyoto.catholic.jp/seinen/

青年センターあんてな